〔学　　会〕

東京女子医科大学学会　第112回例会抄録

日　　時　昭和37年3月16日（金）午後2—4時
場　　所　東京女子医科大学本部講堂

1. 未熟児の父母の年令について

（衛生）窪田　信

昭和30年より同34年までの5年間における日本赤十字社産院の入院分娩記録を使用し，生下時体重2500g以下の未熟児1861例の父母の年令に関して調査し，つぎのような結果を得た．

30年より32年に至る3年間では各々総数の56%が女児で，未熟児の限界である体重2500g附近の出生数は男児より遥かに多かつたが，33，34年の2年間においてはそれが全く逆転し，男児の未熟児総数が増加し，著しく高かつた限界2500g附近の女児出生数は減少している．

父および母の年令については，5年間を通じて父の平均年令32.47，すなわち30～34才が41%で最も多く，25～29才が30%，ついで35～39才，24才以下，40才以上は低率である．

母の年令は平均28.36で，25～29才が50%，30～34才が23%，20～24才が19%を示している．

各年度別にみれば父の平均年令はやや低下の傾向をみせているが，母の平均年令は32年度に27.94と低下し，その後はかえつて急激に上昇し，34年度では28.75と高くなつている．

生下時体重との関連は，30，31年度に比し33，34年度においては体重1500g以下の出生数が増加し，それが父25～39才，母20～34才に著しい．

父および母の年令差についてみるに，父母同年令のものから，その差1～30才父の大なるもの91%，その他は1～15才母の年令大なるものと非常に広範囲に亘つているが，各年度を通じその差0～8才において出生数多く総数の79%，その最高は30，31年度においては5才，32，33年度においては3才，34年度においては2才と次第に年令差はせばまつてきているように思われるが，また一面では33，34年度において増加を示す低体重の出生数は必らずしもその範囲ではなく，また限界2500g附近の出生数にかえつて年令差の大なる両極に少数ながら確実な増加をみせている．

2. 副卵巣嚢腫の1例

（産婦人科）相羽早百合・毛利富士子
中川　博子・柳沢千鶴代

副卵巣嚢腫は1979年 Lauson-Teit によつて報告されて以来，諸家により種々の報告がなされているが，一般に手拳大以上になることはめずらしく，巨大嚢腫形成の報告は稀である．

当教室において副卵巣嚢腫の1例を経験したので報告した．

症例　27才未産婦

主訴：腹部膨隆

既往歴，家族歴：特記すべきことなし．

現病歴：約1年前より，腹部膨隆に気付き，次第に増大し，腫瘤感，胸部圧迫感，食欲減退を訴えるようになつた．

初診時全身所見：腹部高度膨隆，腫瘍上界は臍上3指，下界境界不明瞭，硬度は嚢腫様で軟かく，波動証明，圧痛はない．

内診所見：子宮後傾後屈でやや小，附属器は両側にふれにくく，前腟円蓋部を通して，骨盤中に充満した嚢腫様腫瘤をふれる．波動著明，境界不明瞭．

臨床診断：卵巣嚢腫

手術時所見：開腹すると，帯青白色，表面平滑，血管錯綜する嚢腫壁をみとめ，周囲とのゆ着はない．上界は剣状突起直下，下界は恥骨上に達していた．この巨大嚢腫は左側より発生し，その茎部に腫瘍とは別の健全な卵巣をみとめたので，副卵巣嚢腫と判明，摘出．

肉眼所見：卵形，単房，最大長径28cm，最大横径25cm，重量4040g，内容液は水様透明．

病理所見：嚢腫内面は骰子状の一層の上皮でおゝわれており，その外層は線維性のカプセルである．

3. 帝王切開後の再分娩時に子宮破裂をみた1例

（産婦人科）小野　和江・井口登美子

大塚　節子・都筑　妙子・久野　正恵

私共は最近，前回の分娩に狭骨盤のため帝王切開術を行ない，4年後の今回の分娩に際し，子宮破裂の典型的症状，徴候を示さず，手術時に始めて発見された子宮破裂の1例を経験したので報告した．

患者は27才1回経産婦，入院の4～5日前より腹壁の瘢痕の疼痛を訴えていたが，腹部に筋緊張症なく，胎児部分触診，頭部は恥骨上に触れた．開腹すると，子宮は前回の古典的切開創の瘢痕の全長に亘り破裂し，緊張した卵胞を認めた．健全なる胎児を娩出後，子宮は腟上部切断術を行なつた．術後の経過良好で術後18日目に母児共に元気に退院した．

4．月経困難症に対する複合ブスコパンの効果について

（産婦人科）翠川　洋子・原　　君代
重松　明子・佐藤やい子・渡部モト子

従来月経困難症に対する治療剤として種々なものが使われてきたがまだ有効確実なものはない．当教室では昭和36年より複合ブスコパンを18～45才までの月経時疼痛を主訴とする外来患者25名に原因を問わず1日6錠ないし10錠を投与し，疼痛の完全除去したもの7例，疼痛の軽減したもの13例，無効5例を，また副作用は4～5例口渇を訴えたものがあつたほか著変ないことを観察し，月経困難症の治療剤として複合ブスコパンは有効であることが判明したので報告した．

5．巨大小腸症の1剖検例

（小児科）鰺目　藍子・須賀　方子・内田香栄子

われわれは文献上，極めて稀な小腸の巨大なる1剖検例を経験したので，その臨床経過及び病理所見について報告した．症例は6カ月の女児で家族歴に異常なく，正常分娩で生下時体重2600gの母乳栄養児であつた．生後，少量の胎便を認め，続いて便通は1日2～3回あつたが，1カ月目頃より著明となつた便秘と腹部膨隆を主訴として当院小児科に入院した．入院時所見では栄養不良で四肢の羸痩著るしく，腹部膨隆著明，腹壁緊張高度，鼓腸著明であつた．腸管造影法で巨大結腸症＋過長S字状結腸症と診断し，外科に転科させ手術を行なつた．開腹所見では結腸及び盲腸は正常，回腸は末端部より約10cmは正常の太さであつたが，その上部より急激に拡張し，これが約160cmの長さに亘つていた．手術は小腸拡張部の下部より80cmの部位で空腸結腸間の吻合を行ない，それ以下の拡張部を切除し，空腸回腸断端による人工肛門を造設した．術後6日目に突然，循環不全状態に陥り死亡した．病理解剖の結果，直接の死因は腹壁に縫合された腸管の壊死と手術時の刺激による各臓器の強い循環障害と診断された．腸管の病理所見では，回盲部には粘膜下組織の線維化とリンパ球浸潤及び筋層内の瘢痕による筋の配列不平等，更に粘膜肥厚を認めた．また，小腸拡張部は拡張だけでなく，壁の肥厚，特に筋層の肥大が著明であつた．以上の所見は回盲部に以前に何らかの炎症が存在したことを意味する．そして，この古い炎症による病変部が腸管の内容移動の際に抵抗として働き，これより上部の腸管，すなわち回腸の内容うつ滞を惹起し，そしてこれが腸の発育過程中に起つたため，この部分の腸管の強大な発達を生じたものと推定された．

6．後水晶体線維増殖症の1例

（眼科）矢島美佐子

4才男子の右眼にみられた後水晶体線維増殖症の1症例を経験したので，その臨床所見，及び病理組織所見を報告した．

臨床所見は，右眼視力光覚．斜照法で瞳孔の後方に白い反射がみられ，細隙灯顕微鏡で観察すると網目状になつている結合組織塊が水晶体後面にせまつており，その表面に血管の新生がみられた．眼球摘出術を施行，その病理組織に後水晶体線維増殖症の典型的所見をみとめた．

本患者においては，未熟児でなく，酸素吸入の既往がないにもかかわらず，発病をみたのは，原因論的に興味があると思われる．

7．Coats 氏病の2症例について

（眼科）大行　真理・高橋　祥子

われわれは，最近，12才男子右眼および，20才男子右眼に，それぞれ見られた典型的な Coats 氏病2症例を経験した．

第1例は，右視力 0.2（n.c.）に低下し，眼底下半に特有な変化を認め，第2例は，右視力 0となり，眼底全面に同様の変化を認めた．以上2例につき，全身的検索を行なつたが，今回の検索範囲では，特に所見を認めなかつた．

8．Narkolepsie を随伴した下垂体前葉腫瘍の1例

（精神科）広瀬　憲三・広瀬　洋子・田村　敦子

48才の主婦，24才の時子宮外妊娠の手術をうけ一方の卵巣剔出．その他に著患なく家族的にも特記すべき疾患はない．初潮18才，20才で結婚後28才迄に子供は4人出来たが31才で閉経．43才頃から夜間頻尿，この為の不眠が始まり，尿量も多くなつた．46才から急に老眼が進